

奄美諸島方言の敬語法

— 敬語形式の分布とその展開に着目して —

重野裕美

1. はじめに

琉球方言の中でも、敬語研究はまだ記述・整理が進んでいない分野の1つである。危機言語¹⁾として記録・保存が急がれる現在、対象地域は第一言語が方言から全国共通語(以下、共通語と略す)へと移行しつつある。これまで筆者は、奄美大島龍郷町浦方言を中心に敬語法調査を重ねてきた。調査より、敬語法の共通語化は急速に進んでおり、自由に操れる世代も70歳代以上と高齢であることが判明してきた。

本稿では、現在の奄美諸島方言の動詞に関する敬語法を中心に取り上げ、それらが奄美諸島方言内、琉球方言内においてどのように分布、展開しているかを先行研究による報告も参照としながら明らかにすることを目的とする。

本稿は、次のような構成となっている。2節でこれまでの琉球方言における敬語研究について簡単に触れ、3節では調査の概要や表記法について説明する。中心となるのは4節で、奄美諸島方言内における敬語形式の違いについて、尊敬語・謙讓語・丁寧語に分類し、個々の形式の共時的な地域差や通時的な関連性を先行研究の資料を含めて考察する。5節では、形式と用法の違いが顕著であった丁寧語について取り上げ、奄美諸島の北部に位置する奄美大島浦方言と、南部に位置する与論島茶花方言の丁寧語を比較する。その結果、奄美諸島の敬語形式には同じ北琉球方言に区分される沖縄諸方言だけではなく、南琉球方言である宮古方言や石垣方言との共通性も認められることや、丁寧語の形式と用法の違いから、北部奄美諸島(奄美大島・喜界島・徳之島)と南部奄美諸島(沖永良部島・与論島)に大別することができ、南部の丁寧語の特徴は沖縄方言と類似していることなどを指摘する。最後に6節でまとめと今後の課題について述べる。

2. 先行研究

琉球方言の敬語に関する先行研究として、金城他(1931)、岩倉(1932)があり、各地の目立つ敬語法について取り上げられている。敬語の体系記述を意識したものとしては、仲宗根(1976)、町(1984)、(1997)があげられる。最近では、西岡(2002)、(2004)、(2006)、(2010)により、形態論の観点から沖縄本島や南琉球方言を中心とした整理・分析が行わ

れている。

以上の先行研究の他にも各地域の報告書や辞書、全国を対象とした調査として、『琉球の方言』（1976）、（1978）、（1982）や、『全国方言資料』（1972）、『方言敬語法の研究』（1978）、（1979）、『方言文法全国地図』（2006）などがあり、琉球方言の敬語形式やその用法の一部を観察することができる。

本稿では、敬語の体系的な報告の少なかった奄美諸島方言を対象として、地域差の観点から動詞の敬語形式を中心に、対象地域にどのような敬語形式が存在し、それぞれどのように分布しているかを敬語形式ごとに整理・報告することを目指す。

3. 調査の概要

奄美諸島は、行政区画上鹿児島県に属するが、ことばや文化は琉球文化圏に分類される。琉球方言は、奄美諸島方言・沖縄諸方言の北琉球方言と、宮古諸方言・八重山諸方言・与那国方言の南琉球方言とに分けられる。北琉球方言は奄美諸島方言と沖縄諸方言とに大別されるのが一般的である。奄美大島方言はさらに北部奄美大島方言（笠利町・龍郷町・名瀬市・大和村）と、南部奄美大島方言（住用村・宇検村・瀬戸内町²⁾）とに分けられる³⁾。

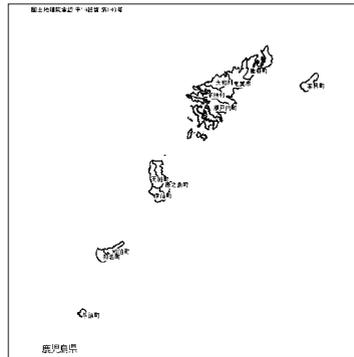


図1：市町村別による奄美諸島地図

3.1. 対象地域

本稿の対象とする地域は、7集落である。図1に市町村ごとの位置を示す。北から、北部奄美大島の龍郷町浦集落、南部奄美大島の瀬戸内町古仁屋集落、喜界島喜界町荒木集落、徳之島天城町浅間集落、北部沖永良部島和泊町畦布集落、南部沖永良部島知名町久志集落、与論島与論町茶花集落の5島7集落を対象とする。奄美大島と沖永良部島は、調査より島内の北部と南部で差が認められたため、各2集落を取り上げる。

3.2. 調査方法

2008年12月～2010年3月の期間内に、各集落に対して面接調査を行った⁴⁾。

調査票は、共通語の分類を参考としながら、これまでの先行研究や対象地域の報告書・辞書などで指摘されている特徴も採集できるように項目を設定した。調査は、共通語で書かれた質問文を調査者である筆者が読み上げ、それを「近所の目上」「親しい友人」「近所の目下」に対して、方言でどのように言い分けるかを聞いている⁵⁾。本稿で対象とした

表1：各集落の話者情報

島名	集落名	調査時の年齢(性別)	調査期間
奄美大島(北部)	龍郷町浦集落	82歳(女性)	2009年8月
奄美大島(南部)	瀬戸内町古仁屋集落	71歳(男性)	2008年12月
喜界島	喜界町荒木集落	70歳(男性)	2009年9月
徳之島	天城町浅間集落	72歳(男性)	2009年3月
沖永良部島(北部)	和泊町畦布集落	80歳(女性)	2009年8月
沖永良部島(南部)	知名町久志検集落	77歳(男性)	2010年3月
与論島	与論町茶花集落	80歳(男性)	2009年8月

話者情報は、表1の通りである。

各地域の話者より「敬語は男女で違いはない」との意見が得られ、実際の回答でも形式や用法に違いは認められなかったため、本稿は性差を考慮しない。対象としたのは、年齢が70歳代以上で、言語形成期を対象集落で過ごし、居住歴の長い方言話者である。なお、今回対象とする方言話者全員が両親も対象集落出身者である。

3.3. 表記方法

方言の表記法は、簡略化した音韻表記で示す。また、敬語動詞などは、主としてr語尾終止形の形で示す⁶⁾。しかし、m語尾しか回答として得られなかった場合は、m語尾の形で示している。

奄美諸島方言の敬語法についての比較を行うが、項目によっては敬語動詞が取り出せない地域もあり、統一した見出し語を方言名でつけることが困難である。そのため、本稿では共通語の敬語形式を項目名とする。

例文は文節ごとに形態素分析を行い、グロス(文法的情報)と共通語訳をつけて示す。同じ意味で2形式が表れる場合は、頻出したものを先に示す。方言の例は、全て話者の回答を扱う。

4. 奄美諸島方言の敬語法

本節では、奄美諸島方言の敬語法について動詞を中心に比較する。奄美諸島方言にも、共通語と同様、尊敬語・謙譲語・丁寧語の枠組みが存在する。

共通語の「行く」が「いらっしゃる」と語ごと置き換えられるように不規則な対応をする敬語形式を「自立形式」、⁷⁾「読む」が「読みなさる」となるように動詞から規則的につくられる敬語形式を「付随形式」と本稿ではよぶことにする。以下、尊敬語・謙譲語・丁寧語の順に比較する。

4.1. 尊敬語

尊敬語の4つの自立形式と3つの付属形式について、以下比較を行う。

4.1.1. 尊敬語の自立形式

① くいらっしやる系

奄美大島(北部)	浦	?imori ⁷⁾
(南部)	古仁屋	?umoori
喜界島	荒木	?umoori
徳之島	浅間	?moojui
沖永良部島(北部)	畦布	?moori
(南部)	久志検	?meen、?moori
与論島	茶花	?ei、?waari

/?imori/系は、共通語の「いらっしやる」と同じく「行く」「来る」「居る」の尊敬語の自立形式であるが、さらに「言う」の尊敬語としても各地域で用いられる。奄美大島から沖永良部島までは/?imori/系が用いられるが、沖永良部島久志検方言で/?meen/と/?moori/が、与論島では/?ei/と/?waari/が用いられる。奄美諸島の北部に、/?imori/系が広がっている。

仲宗根(1976:497)は、/?imori/系を共通語の古語である「御坐す」や、琉球の古代歌謡集成書『おもろさうし』に頻出する敬語動詞「おわる」と関連のある敬語動詞であると指摘している。また、沖縄方言におけるくいらっしやる系の平民敬語⁸⁾は「もールン(/?moorun/)」、士族敬語は「めんセン(/?mensen/)」、「めんソールン(/?mensoorun/)」であるとし、平民の敬語「もールン」は奄美諸島にも分布しているとの指摘がある。さらにその語構成として、「もールン/?moorun/」は「いみーおわる」の融合形と考え、接頭辞である「いみ」は、上代語の「います」や「往ぬ」と関係があると推定している。

奄美諸島では、平民敬語の/?moorun/系が奄美大島から沖永良部島まで広がっているが、沖永良部島南部の久志検方言では、士族敬語として用いられていた/?mensen/系と関連性のある/?meen/が用いられていることが判明した。久志検方言の/?meen/と/?moori/は、どちらも「行く」「来る」「居る」の尊敬語として回答が得られるが、/?meen/の方が頻出する。また、与論島で用いられている/?waari/は、語源が古語の「おわる」に相当するものと考えられる。南琉球方言の宮古方言や石垣方言に「おわる」に相当する/?waari/や/?oorun/が分布しているため興味深い(仲宗根1976:502、西岡2006:120)。与論島では、/?waari/の他に/?ei/も用いられる。詳細な使い分けについては今後の課題である⁹⁾。

②〈召しあがる系〉

奄美大島（北部）	浦	misjori
（南部）	古仁屋	misjori
喜界島	荒木	misjori
徳之島	浅間	?nkjagiri
沖永良部島（北部）	畦布	?oisiri
（南部）	久志検	?oisiri
与論島	茶花	?agiti?waari

〈召しあがる系〉は、各島で用いる形式が異なる。奄美大島と喜界島では、/misjori/が用いられる¹⁰⁾。仲宗根（1976：497）は、その語構成を「めしーおわる」と推定している。

徳之島の/?nkjagiri/は、仲宗根（1976：502）や西岡（2010：198）の報告により、沖縄北部方言や宮古方言や石垣方言に広がっていることが確認できる。なお、伊波普猷によると首里方言では古い敬語動詞として「ンカギーン」が存在していたとの指摘がある（金城他（1931：71））。徳之島で用いられている/?nkjagiri/は、それと同語源であると考えられよう。

また、沖永良部島の/?oisiri/は、西岡（2006：121）の調査した石垣島登野城方言にある/?oisjon/と同語源と考えられる。

与論島では、自立形式は得られず、付属形式の/?agiti?waari/が得られる。『与論方言辞典』（2005）では、/?agajun/「上げる」の尊敬語として/?agijn/がある。今回調査した話者の内省では、/?agijn/単独よりも/?waari/をつけた付属形式の方が待遇の価値が高いとのことである。〈召しあがる系〉の語構成は、奄美大島と喜界島は「召しおわる」、徳之島・沖永良部島・与論島は「上がる」に相当するものを用いるようである。

③〈くださる系〉

奄美大島（北部）	浦	—
（南部）	古仁屋	taboori
喜界島	荒木	taboori
徳之島	浅間	taboori
沖永良部島（北部）	畦布	taboori
（南部）	久志検	taboori
与論島	茶花	tabaari

〈くださる系〉の自立形式は、奄美諸島の中で共通して広がっている尊敬語動詞であるが、浦方言のみ認められなかった。/taboori/の有無を聞くと、浦方言話者からは「島唄の歌詞

にある敬いことばだ」との意見が得られる。同じ奄美大島内でも、南部の古仁屋集落では頻繁に用いられているのに対して、北部の浦方言では「親世代の会話でも聞いたことがない」とのことであった。/taboori/系に対応するものとして、/kureri/「くれる」に後述する/-nsjori/くなさる系)を後接させた/kurinsjori/という付属形式を用いる。また、/taboori/系は、宮古方言や石垣方言でも用いられている(仲宗根1976:502、西岡2006:124)。

④ くお目覚めになる系)

「起きる」の尊敬語である/wuzumjuri/は、浦方言からしか得られなかった敬語動詞である。奄美大島の旧名瀬市(現奄美市)の方言を主に記述した寺師(1981:(3)-19)では、「お起きになる」の尊敬語動詞として「ウズミュン」があげられている。

浦方言話者からは、「両親世代が、祖父母に使っていたのを聞いたことがある。私自身は日常的にあまり使わない」とのことであった。地域的な広がりも認められず、使用頻度も低いことから、衰退しつつある敬語動詞と考えられる。

以上、尊敬語の自立形式を比較した。くいらっしやる系)とくくださる系)は、奄美諸島方言だけではなく、沖縄本島や南琉球方言にも似た形式が広がっている。く召しあがる系)は地域ごとに形式のバリエーションがあり、徳之島の/?nkagiri/は沖縄本島や南琉球にも広がっている古い敬語動詞のようである。くお目覚めになる系)は「起きる」の尊敬語動詞として用いられるが、先行研究にも用例はほとんど見当たらず、奄美大島の北部方言にのみ自立形式として存在する。

また、くいらっしやる系)に関しては、沖永良部島が沖縄の土族敬語に相当する敬語動詞が用いながらも、その他の地域と同じく平民敬語に似た形式が併用されており興味深い。さらに、北部は奄美大島・徳之島、南部は与論島や沖縄本島との共通性が認められるため、沖永良部島内の詳細な調査や、敬語形式が併用されている場合の使い分けなどは今後の課題としたい。

4.1.2. 尊敬語の付属形式

① くいらっしやる系)

奄美大島(北部)	浦	-mori	
	(南部)	古仁屋	-moori
喜界島	荒木	-moori	
徳之島	浅間	-moojui	
沖永良部島(北部)	畦布	-moori	
	(南部)	久志検	-meen、-moori
与論島	茶花	-ei、-waari	

自立形式としても用いられる「いらっしゃる」系は、「～ていく」「～てくる」「～ている」の意味で文法化し、動詞の接続形に後接する付属形式として用いられる。久志検方言、茶花方言では2形式が表れ、その付属形式としての使い分けについての詳細は、自立形式と同様今後の課題とする。

② くくださる系)

奄美大島(北部)	浦	—
	(南部)	古仁屋 -taboori
喜界島	荒木	-taboori
徳之島	浅間	-taboori
沖永良部島(北部)	畦布	-taboori
	(南部)	久志検 -taboori
与論島	茶花	-tabaari

くくださる系も自立形式と同様、共通語の「～てくださる」に相当する付属形式であり、動詞の接続形に後接し、活発に用いられる。やはり、浦方言に/-tabori/は認められない。浦方言では、/-kurnisjori/「～てくれなさる」に相当する形式が用いられる。南部奄美大島の古仁屋方言でも、/-kurnisjooruri/を用いるが、/-taboori/系の付属形式が頻出する。

③ くなさる系)・くお～する系)

奄美大島(北部)	浦	-nsjori
	(南部)	古仁屋 -nsjoori
喜界島	荒木	-nsoori
徳之島	浅間	(-nsjoori)
沖永良部島(北部)	畦布	-nsjoori
	(南部)	久志検 —
与論島	茶花	—

奄美大島から沖永良部の北部まで、/-nsjori/系が広がっている。これは、自立形式の/misjori/〈召しあがる系〉が文法化したものであるが、意味としては共通語の「する」の尊敬語形式である「なさる」に相当し、動詞の連用形に後接する。徳之島浅間方言話者より、「/-nsjoori/も使うけれども、使う人は少なくなった。/-nsjoori/を使うと距離があるように感じる」との意見が得られるが、実際の回答では一例も得られなかった。そのため括弧で示す。徳之島浅間方言では、衰退している形式と考えられる。

一方、沖永良部島久志検方言や与論島茶花方言では、他の付属形式であるくくださる系) やくいらっしやる系)、または後述する丁寧形が用いられるようである。

与論島茶花方言で/-nsjori/系は一例も得られなかった。しかし、『与論方言辞典』(2005: 639)には、「ンシャー・リ」/nsjaari/として見出し語があげられている。解釈として「く稀」…しなさいませ。「せよ」の尊敬語」とあり、日常会話では姿を消しているが、八月踊りの迎える言葉や、神仏に祈願するときに用いられるとのことである。このように、祝詞という特別な場面に用いられる敬語形式も存在するため、今後の調査の課題としたい。

以上、尊敬語の付属形式を比較した。付属形式は各地域、類似した形式が用いられており、全て自立形式が文法化したものと考えられる。

4.2. 謙譲語

謙譲語は、謙譲語A「話手が補語を高め、主語を低める」(菊地1994: 210)に対応するものしかなく、共通語のように2分類する必要はない。以下、3つの自立形式と1つの付属形式の比較を行う。

4.2.1. 謙譲語の自立形式

① くさしあげる系)

奄美大島(北部)	浦	?oseri
(南部)	古仁屋	?uwīirur ¹¹⁾
喜界島	荒木	weesiri
徳之島	浅間	wēēsiri
沖永良部島(北部)	畦布	?oisjun
(南部)	久志検	?oisjun
与論島	茶花	weesiri

各地域では、同語源と考えられる/?oseri/系が用いられる。寺師(1981: (3)-19)は方言で「上」のことを/wīi/と言うため、/?oseri/は古くは/wīseri/と推定し、「上げる」¹²⁾の意味との関連性を指摘している。

沖永良部島で用いられている/?oisjun/は、尊敬語動詞の/?oisjon/「召しあがる」と同義語であろう。「上がる」の意味に尊敬語動詞「おわる」と関連のある敬語形態素/-jon/が後接したものだろうか。詳細な形態素の意味や機能の分析は、各地域の敬語形態素を比較しながら検討したい。

② く申しあげる系)

奄美大島(北部)	浦	(sirareri)
----------	---	------------

	(南部)	古仁屋	—
喜界島		荒木	—
徳之島		浅間	—
沖永良部島(北部)		畦布	(sjaajun)
	(南部)	久志検	—
与論島		茶花	—

奄美大島浦方言と沖永良部島畦布方言から、/sirareri/と/sjaajun/が得られたが、両話者とも「それは親や祖父母が使っていたのを小さい頃に聞いたことがある」「昔の人、特に明治生まれの人が使う」との意見であり、実際に話者自身で使うことはほとんどないのであった。『奄美方言分類辞典』(1980:389)に/?juuri/「言う」の謙譲語として、/sirareruri/「申しあげる」があげられている。また、金城他(1931:73-74)で岩切登は、奄美大島龍郷町龍郷集落の例をあげている。その例文に「(0)辞去の場合」として「ゴツトウ。ドゥクサシモレーチ、シラレンショツトレー(皆さんお達者であられるやうに申し上げてください)」(下線部筆者)があげられており、「申しあげる」として「シラレ」が表れる。1930年代は、あいさつ場面で使われていたことが分かる。また『与論方言辞典』(2005:212)では「申し上げる」に相当する「サーリ・ユン」/saarjun/が見出し語にあげられているが、茶花方言話者は使わないとのことであった。

仲宗根(1976:493)に琉球の古代歌謡『おもろさうし』にくしられ系があり、沖縄本島中部を中心として、宮古方言、石垣方言に「申しあげる」に相当する謙譲語動詞として広がっているとの指摘がある。仲原・外間(1967:164)によると「しられ」は「オモロ人達にとって神に「しられる(知られる)」ことは、神に守護されることだと信じられていたようである。」との解釈がある。

南琉球方言にも広がっている古い謙譲語動詞だが、奄美諸島では/sirareri/系は衰退しているようだ。謙譲語動詞を用いないかわりに、各地域では「言いたいことがあります」「話したいことがあります」に相当する表現を用いる。以下、浦方言の「目上」に対して/sirareri/を用いる場合と、用いない場合の例を示す。

- (1) nan=zji sirarecjasan kutu=nu ?ar-jor-i.
 あなた=に 知らせたい,連体形 こと=が ある-丁寧-非過去
 (あなたに 知らせたい ことが あります。)
- (2) nan=zji ?jiicjasan kutu=nu ?ar-jor-i.
 あなた=に 言いたい,連体形 こと=が ある-丁寧-非過去
 (あなたに 言いたい ことが あります。)

(1)は、共通語の「知らせたい」に相当する。/sirareri/は常態/sicjuri/「知る」の使役表

現であるが、目上から目下へ用いられることはないため、用法上では敬語形式と認められる。現在は、(2)のように常態/ʔjuuri/（言う）が用いられる。/ʔjuuri/に目上・目下の使い分けの機能はない。奄美諸島の〈申しあげる系〉は、自立形式に相当する形式を用いるのではなく、/ʔarjori/「あります」の部分で丁寧形で表し、聞き手に敬意を示す。

③ 〈拝む系〉（お会いする）

奄美大島（北部）	浦	ʔugandusarjori jaa
	（南部）	古仁屋 ʔogandusarjooi jaa
喜界島	荒木	ʔuganduusa den jaa
徳之島	浅間	mīduuha jaa
沖永良部島（北部）	畦布	ʔugamiduusa
	（南部）	久志検 ʔugamiduusa jaa
与論島	茶花	ʔugaduusa ni jaa

〈拝む系〉は、各地域のあいさつ表現で取り出せる。『奄美方言分類辞典』（1980：413）では/mjuuri/「見る」に対する謙譲語として/wogamuri/であげられている。共通語の「お久しぶり」「ご無沙汰」に対応して、/wugami/の連用形が前接した/wugandusa/「拝み遠さ」という名詞化した形式が表れる。これも、仲宗根（1976：502）で沖縄本島や宮古方言にも存在することが確認できる。徳之島浅間方言では、「目遠さ」に対応する形式が表れる。

以上、謙譲語の自立形式を比較した。謙譲語の自立形式は、各地域似た形式であり、沖縄本島や南琉球でも〈さしあげる系〉は「上げる」に、〈申しあげる系〉は「知られる」に、共通語の「お会いする」に対応するものは〈拝む系〉が表れた。奄美諸島で共通して表れる形式は、沖縄本島や南琉球にも広く分布していることが指摘できる。

4.2.2. 謙譲語の付属形式

① 〈さしあげる系〉

奄美大島（北部）	浦	-oseri
	（南部）	古仁屋 -uwīirur
喜界島	荒木	-weesiri
徳之島	浅間	-wēēsiri
沖永良部島（北部）	畦布	-oisjun
	（南部）	久志検 -oisjun
与論島	茶花	-weesiri

謙讓語の付属形式では、謙讓語の自立形式でもある〈さしあげる系〉がそれぞれ用いられる。共通語では授受動詞であるゆえに「～してさしあげる」は、「恩着せがましさ」が感じられるが、奄美諸島方言話者の内省ではそのようなニュアンスは感じられないとのことであった。付属形式としての使用率は低いが、「私と一緒にお供してさしあげる」の意味で話者から聞き出すことができる。以下、浦方言における回答を代表で示す。

- (3) wa=ga maazjin seekacukwan=zji tomosi-oser-jor-joo.
 私=が 一緒に 生活館=に 供する.接続形-さしあげる-丁寧-意志
 (私と一緒に(に)生活館に(お)供してさしあげましょう。)

このように、用いられる場面が特化されつつある敬語形式もある。敬語形式は特定の場面にその使用が限定されるものもあるため、人間関係による場面差だけではなく、あいさつ場面や聞き手が複数いる場合、神仏に対して祈願する場合などを考慮する必要がある。

謙讓語の付属形式は、〈さしあげる系〉のみであり、尊敬語の付属形式と同様、自立形式が文法化したものが用いられる。

4.3. 丁寧語

丁寧語は、聞き手に対して話し手が敬意を表す敬語形式である。付属形式のみがあり、用言系(動詞・形容詞)につく場合と、体言系(名詞・副詞など)につく場合とで、後接する形式が異なる。この前接する品詞により形式が異なるという区別は、奄美諸島方言において共通している。以下、動詞「居る」につく場合と、名詞「本」につく場合とを例に示す。

①動詞「居る」につく場合

奄美大島(北部)	浦	wur-jori
	(南部)	古仁屋 wur-joor
喜界島	荒木	wur-eeen
徳之島	浅間	wur-eejui
沖永良部島(北部)	畦布	wu-jabun
	(南部)	久志検 wu-jabun
与論島	茶花	wu-jabjui

動詞につく形式は、奄美大島・喜界島・徳之島と、沖永良部島・与論島に大別できる。前者は、動詞の基本語幹に/-jor/・/-joor/・/-eeen/・/-eejui/を後接させ、後者は/-jabun/・/-jabjui/を後接させる。奄美大島で用いられている/-jor/・/-joor/は、尊敬動詞「おわる」

が文法化したものと考えられる。喜界島・徳之島で用いられる /-een/・/-eejui/ は、現在のところ語源は不明である。仲宗根 (1976: 497) で、

士族の敬語の「めんセン/?mensen/」、「めんソールン (?mensoorun/)」は、「いみあり」から変化したイメン (イメン) にさらに「めしあり」「めしおわる」から変化した補助動詞ミセン・ミソールンが結合してできたものである。

と指摘していることから、喜界島・徳之島で用いられる /-een/・/-eejui/ は「あり」が文法化したものと考えられる。

一方、沖永良部島・与論島で用いられる /-jabun/・/-jabjui/ は、沖縄本島でも丁寧語として用いられる「侍り」と対応していることは早くから指摘されている (『沖縄語辞典』(1963: 77) など)。

②名詞/hon/「本」につく場合

奄美大島 (北部)	浦	hon darjori
(南部)	古仁屋	hon darjoor
喜界島	荒木	hon den
徳之島	浅間	hon daren
沖永良部島 (北部)	畦布	hon diroo
(南部)	久志検	hon diroo
与論島	茶花	hon ?eibjun

名詞につく形式は、動詞につく場合と異なり、与論島だけが/?eibjun/の「侍る」系を用いる。/?eibjun/は、尊敬語として用いられる動詞/?ei/に「侍る」の/-bjun/が後接したものであろうか。

奄美大島から沖永良部までは/d-/から始まる形式となる。この/d-/に関しては、係助詞/du/と推定される。『奄美方言分類辞典』(1980: 505-506)でも、奄美大島の/darjori/は「du ?arjori 《(ぞ) であります》の短縮形か」との記述がある。このことから、奄美大島の/darjori/は「係助詞du+ari (あり)+ori (おわる)」と分析できる。名刺につく丁寧語形式/darjori/は、動詞の場合と同じく/-jor/が後接しているため、丁寧語は2形式あるというより、丁寧語の付属形式として/-jor/が表れると解釈できる。

以上、丁寧語が動詞につく場合と、名詞につく場合に比べて比較を行った。結果、用言系に後接する場合の形式は、奄美大島は「おわる」に、喜界島・徳之島は「あり」に、沖永良部・与論島は「侍り」に対応するものが丁寧語形式として用いられていた。また、体言系に後接する場合は、奄美大島から沖永良部島は係り助詞duに由来すると考えられる

ものに丁寧語形式が融合しているが、与論島は尊敬語の自立形式にも用いられる/?ei/に「侍り」に対応する形式が融合した形式を用いる。

5. 奄美大島浦方言と与論島茶花方言の丁寧語の用法差

前節において、丁寧語に用いられている形式の違いから、奄美大島・喜界島・徳之島と沖永良部島・与論島に大別できることを述べた。本節では、奄美諸島方言の北部に位置する奄美大島浦方言と、南部に位置する与論島茶花方言を比較し、丁寧語に用法差があることを指摘する。

浦方言の/-jor/は、これまでの先行研究では共通語の丁寧語「ます」に対応するとの説明が主であった（『奄美方言分類辞典』1980：503）。しかし、今回の調査から、聞き手に対する敬意を表す機能は共通しているが、その用法として「目上」の行為に対して丁寧語/-jor/を用いることができないという制限があることが明らかになった。以下、浦方言の例を示す。

- (4) *¹³ sensee=ja gakkoo=ccji ?ik-jor-i.
先生=は 学校=へ 行く-丁寧-非過去
(先生は 学校へ 行きます。)

共通語の場合は、「先生」の動作について丁寧語「ます」を用いることができるけれども、浦方言では非文となる。これまでの先行研究の説明や例文では、このような指摘は見当たらない。「動詞の基本語幹+/-jor」は、「話し手」自身か「目下」の行為を、「聞き手＝目上」に対して述べる場合に用いられる。

- (5) wutuutu=ja gakkoo=ccji ?ik-jor-i.
弟=は 学校=へ 行く-丁寧-非過去
(弟は 学校へ 行きます。)

また、次のように、話題に登場するのが人以外の「事物」であっても、丁寧語を用いて表すことができる。これは、共通語の丁寧語「ます」と同じ用いられ方である。

- (6) basu=nu gakkoo=ccji ?ik-jor-i.
バス=が 学校=へ 行く-丁寧-非過去
(バスが 学校へ 行きます。)

一方、名詞や副詞などに後接する/darjori/は、/-jor/が融合しているが(3)のような制限はなく、「話題に登場する人物」が「目上」であっても用いられる。

- (7) ?aŋ ?ɕju=ja sensee darjor-i.
 あの 人=は 先生 <係助詞du-ari-ori>-非過去
 (あの 人は 先生 でございます。)

丁寧語/-jor/の語源であると考えられる「おわる」の文法化に関して、仲宗根(1976:500)には以下のような記述がある。

「おわる」も『おもろさうし』と同じように、補助動詞としてもちいられているが、組踊では意味が変化して、自分の動作や、目下の動作に用いられて、目上には用いられていない。もはや尊敬補助動詞ということは出来ない。

(イ) 自分の動作に用いられた例:

^{デイヨウチヤルムヌヤ}
 出様ちやるものや くまかりいでたる者は)

(ロ) 目下の者に用いられた例:

(あまおへから供へ) ^{サキニ}酒よ ^{サキニ}酒よ ^{ダシヨウリ}出しやうれ ^{ダシヨウリ}出しやうれ (護佐丸敵討)
 (外間の子から供へ) ^{シニ}宿主の ^{ヤドウスシ}名字 ^{ミヨージ}尋ねやりきやうれ ^{タズニヤイキヨウリ}(忠士身替の巻)

この「組踊では意味が変化して、自分の動作や、目下の動作に用いられて、目上には用いられていない」という用法と、「連用形+おわる」に相当する形式は、浦方言の丁寧語の形式と用法に共通性が認められる。しかし、西岡(2004:64)が指摘するように、仲宗根(1976:500)の「連用形+おわる」の形式は大部分が(イ)の例である「目下への命令形」となり(全37例中、33例)、「目上への敬意」は感じられず、目下の聞き手に対して単に動作を促しているものが多いようだ。「連用形+おわる」の形式の通時的な変化については、今後の課題としたい。一方、与論島茶花方言では、「話題に登場する人物」や「事物」に関係なく、「目上」の聞き手に対して敬意を表すために/-jabju/または/?eibju/の<侍り系>の丁寧語が用いられる。

- (8) sjensjee=ga gakkoo=kati ?ik-jaabju-i.
 先生=が^ガ 学校=へ 行く-丁寧-非過去
 (先生が^ガ 学校へ 行きます。)

- (9) wutturu=ga gakkoo=kati ?ik-jaabju-i.
 弟=が^ガ 学校=へ 行く-丁寧-非過去

(弟が 学校へ 行きます。)

- (10) basu=ga gakkoo=kati ?ik-jaabju-i.
バス=が 学校=へ 行く-丁寧-非過去
(バスが 学校へ 行きます。)

/?ikjaabju-i/が、「話題の人物」または「事物」に関係なく聞き手に対して敬意を表すために用いられることが分かる。また、「先生」という名詞につく場合も〈侍り系〉が用いられる。

- (11) ?anu picju=ja sjensjee ?ei-bju-i.
あの 人=は 先生 存在.尊敬-丁寧-非過去
(あの 人は 先生 でございます)

沖縄方言でも、「動詞の連用形+侍り」に対応する/-jabiin/が丁寧語として動詞にも名詞にも用いられることが、与論島の丁寧語と類似している。奄美諸島の丁寧語形式において、〈侍り系〉を用いるか用いないかで、奄美大島・喜界島・徳之島と沖永良部島・与論島とに大別することができる。また、沖縄本島でも〈侍り系〉を丁寧語として用いていることから、北琉球における丁寧語の境界線が徳之島と沖永良部島の間で引かれることになる。

以上、奄美諸島の北部である奄美大島浦方言と南部である与論島茶花方言の丁寧語を比較した。両者の丁寧語は用いられている形式も用法も異なる。また、浦方言は「目上」の行為に対して用いることができないため、丁寧語化の途中の段階とも考えられる。対者敬語の場面で「目上」の聞き手に対して尊敬語を用いる場合、共通語なら「尊敬語+丁寧語」の形式を用いる場面であるが奄美大島浦方言では丁寧語をつける義務がないためである。このような場面ごとの丁寧語の表れ方、敬語形式の承接関係についても今後の課題としたい。

6. まとめと今後の課題

本稿では、動詞の敬語法を中心に尊敬語・謙譲語・丁寧語ごとの地域差をみてきた。先行研究である沖縄本島や南琉球の敬語法との比較を通して概観すると、奄美諸島方言には沖縄本島の平民敬語に似た形式が広がっていることが指摘できる。しかし、沖永良部島などには士族敬語で用いられる敬語形式と関連するものも存在するため、人間関係や場面差を考慮した調査や、歴史的な観点からの考察も必要だろう。また、沖縄本島には接頭辞の「お」や「ご」に相当するものをつけ敬語形式をつくることができるが、奄美諸島方言に

はそのような用法はほとんど認められないという違いもみられた。

以上のように、同じ調査票を用いることで、各地域の資料を共時的に観察することができる。そこから、通時的な言語の方向性も推定することが可能となるだろう。

今後は、本稿で明らかとなった敬語法の特徴をもとに、自然談話などから実際の運用を採集しながら、各地域の言語生活に沿ったより詳細な敬語法の記述・整理を行いたい。

注：

- 1) 奄美諸島を含む琉球方言は、2009年2月19日に国連教育科学文化機関（ユネスコ）で危機言語の一つとして指定された。
- 2) 瀬戸内町は、奄美大島本島の南部だけではなく、その属島である加計呂麻島・請島・与路島も含められる。地続きでない属島もそれぞれの言語事象に特徴的な地域差があるが、本稿では瀬戸内町方言の敬語法を古仁屋集落で代表させる。
- 3) 琉球方言の方言区画については、上村（1992：773）「琉球列島の言語」『言語学大辞典』の分類を参考としている。
- 4) 奄美諸島方言調査は、町博光氏と共同で調査している。本稿では、その資料を利用する。また、本稿で扱う資料は、筆者が文字起こしや分析を行っているため、責任は筆者が負うものとする。
- 5) 調査では、聞き手に対してどのように言い分けるかも考慮している。「目上」「友人」「目下」の三者それぞれに対して敬語形式を重ねたり、減らしたりして述べ方を分ける話者も存在したが、基本的に「目上」に敬語形式を用い、「友人」「目下」には用いない。対象地域は、「目上」対「友人（同等）・目下」という二者への使い分けである。
- 6) 伝統的にri語尾とn/m語尾があるとの指摘がある。当該地域方言では、非過去の終止形接尾語としてri語尾とm語尾を取り出すことができる。本稿では、ri語尾を終止形の代表例として示す。また、例文を示す際は、現時点における形態分析上、ri語尾は-iで、m語尾は-Nと表記している。上村（1992：805）には、-i（ri語尾）と-N（m語尾）の違いは、客観的な表現と主観的な表現とに分かれるとする。本調査でも話し手の意志を表すには-N語尾が使われる傾向が見られた。両者の詳細な使い分けについては、別の稿で考察したい。
- 7) 浦方言の敬語動詞/?imori/は、語頭の/i/が脱落した/?mori/の形式が頻出するが、話者より「/?imori/が本当で、より丁寧な表現」という意見が得られるため、/?imori/を代表形として示す。なお、奄美大島方言では、北部では/?imori/、南部では/?umori/や/?omori/が用いられる。また、最北端集落の旧笠利町佐仁集落と、最南端集落の瀬戸内町与路集落では仲宗根（1976）の指摘する接頭辞「いみ」が融合しない「おわる」のみの形式として/?oori/が用いられる。この「いらっしゃる」に相当する/?imori/系の分布については、調査範囲を広げ詳細な資料を集めた上で考察を進めたい。
- 8) 金城（1931：69）では、「首里・那覇の口語は普通三種に使い分けられてゐて、「ウー・フー」言葉「オー・ホー」言葉「イー・ヒー」言葉の三つが之であつて、前二者が所謂敬語で最後のものは對稱

- 又は卑稱にあたる。これら三種の言葉が、年齢、階級、性別によつて嚴格に使ひ分けられるのである。註。「ウー」「オー」「イー」は肯定の場合の日本の「はい」にあたり、「フー」「ホー」「ヒー」は返事して答へる場合の「はい」に當る。首里那覇では敬語を使ふ事を普通「ウー・フー」と云つてゐる」とある。土族敬語が「ウー・フー」言葉、平民敬語が「オー・ホー」言葉となる。
- 9) 与論島朝戸集落出身の町博光氏（調査時59歳）の内省によると、「活用形の違いで/?waari/と/?ei/は使い分けている可能性がある」との教示を得ている。
- 10) 奄美大島方言では、目上から目下へ使う親愛語に近い表現がある。調査より、北部では/toi/、南部では/boi/が用いられ、話者によると「幼い子どもに対して親や祖父母などが「食べなさい」「食べてごらん」という意味で/kami/「食べろ」よりは丁寧な表現として使う」ようである。また、奄美大島方言からしか得られていないが、琉球方言全体で存在するのかなどを今後の調査でも考慮して進めたい。
- 11) 古仁屋集落を含めた南奄美大島方言（宇檢村・瀬戸内町）では、狭母音の脱落によるとじ音節構造（閉音節構造・CVC構造）をよく発達させている（上村1992:780）。その特徴により、北奄美大島方言と南奄美大島方言が明確に区別できる基準の一つである。そのため、ri語尾に相当するものは/i/を脱落させr語尾となる傾向にある。今回調査した話者からは、ri語尾とr語尾の両方が得られる。この「ゆれ」と思われるものも、本稿では「現在の敬語法の記述」をテーマにしているため、そのまま回答例として示している。
- 12) 「上げる」の方言は、奄美大島では/?agiri/または/?agiruri/である。
- 13) 「*印」は、その文が非文であることを表す。

参考文献：

- 岩倉市郎（1932）「喜界島に於ける敬語法」『旅と伝説』4-12、pp.65-66
- 上村幸雄（1992）「琉球列島の言語」『言語学大辞典 第4巻 世界言語編』三省堂、pp.771-891
- 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子共編（1980）『奄美方言分類辞典 下巻』笠間書院
- 菊地康人（1994）『敬語』角川書店
- 菊千代・高橋俊三（2005）『与論方言辞典』武蔵野書院
- 金城朝永他（1931）「南島方言に於ける敬語法（第2回例会記録）」『旅と伝説』5-2、pp.69-74
- 国立国語研究所編（1963）『沖縄語辞典』財務省印刷局
- 国立国語研究所編（2006）『方言文法全国地図 第6集』国立印刷局
- 寺師忠夫（1981）『奄美方言の研究』寺師忠夫
- 仲宗根政善（1976）「宮古および沖縄本島方言の敬語法 —『いらっしやる』を中心として—」『沖縄 自然・文化・社会』（1976）九学会連合沖縄調査委員会、弘文堂、pp.491-502 [『琉球方言の研究』新泉社、1987に所収]
- 仲原善忠・外間守善（1967）『おもろさうし辞典・総索引』角川書店
- 西岡 敏（2002）『沖縄語首里方言の敬語体系』東京大学大学院人文社会学系研究科、学位論文

- 西岡 敏 (2004)「組踊の謙譲語 — 現代首里方言との比較と通して—」『琉球の方言』28号、法政大学
沖繩文化研究所、pp.53-68
- 西岡 敏 (2006)「石垣方言の敬語概略」『南島文化研究所叢書 1 八重山の地域性』編集工房東洋企画、
pp.113-132
- 西岡 敏 (2010)「宮古方言における敬語法の記述」『日本語研究の12章』明治書院、pp.196-209
- 日本放送協会編 (1972)『全国方言資料 第10巻 琉球編 1』日本放送出版協会
- 藤原与一 (1978)『昭和日本語方言の総合的研究第一巻 方言敬語法の研究』春陽堂
- 藤原与一 (1979)『昭和日本語方言の総合的研究第二巻 方言敬語法の研究 続篇』春陽堂
- 法政大学沖繩文化研究所編 (1976)『琉球の方言 奄美大島宇検村湯湾方言』法政大学沖繩文化研究所
- 法政大学沖繩文化研究所編 (1978)『琉球の方言 奄美喜界島志戸桶』法政大学沖繩文化研究所
- 法政大学沖繩文化研究所編 (1982)『琉球の方言 奄美沖永良部島の方言』法政大学沖繩文化研究所
- 町 博光 (1984)「西表島舟浮集落の方言敬語法」『広島女子大学文学部紀要』19、pp.49-57
- 町 博光 (1997)「鹿児島県大島郡与論町朝戸方言の待遇表現」『方言資料叢刊 第7巻 方言の待遇表現』方言研究ゼミナール、pp.224-229

〔付 記〕

本稿は、平成21年度広島大学国語国文学会研究会において口頭発表した内容を、大幅に加筆・修正したものです。また、査読委員の方々からも貴重なご意見やご指摘をいただきました。記して感謝申し上げます。

— しげの・ひろみ、広島大学大学院教育学研究科博士課程後期在学 —